

三日月の光



無邊光の卷



御遺文

無邊光

阿彌の本質は絶対精神にして 世界及個人の本體にして 且つ之に統攝せられた之に歸趣せさすべき 最終目的ある理性あるは已に説明しぬ。而して 吾人は絶対精神の一現象なることも已に證明す。是よりは進んで阿彌無邊光 即ち一切慧の形式内容、清淨本然として法界に周徧す。業に循ひ隨縁に發現す。之が一個人現體に如何なる心象として現すべきや。また之を證明することを得べきやは 是より漸次に證明せんとす。

阿彌の本質は 非物質に精神態 また非人格なる事は已に論じぬ。而して阿彌の絶對精神の屬性なる 一切慧によりて 吾人は心機開展せられて 自己全く阿彌の中なる自己にして 阿彌を離れて 自己なきことも已に論じぬ。
阿彌の屬性なる 一切慧は法界に周徧して 絶對寫象として 無邊にして 内外に

充滿せば 個人の精神に如何に顯現して 之を證明することを得べきや。いま一切慧を四種とし 即ち四智を以て 四智の本質は本然として 法界に周徧せることを證明せん。

般若即周徧せる知慧態は大にして 處として照さざるなし。法爾本法として 本質は周徧せり。個人の機能によつて發現せる人格ありて 一切の萬物は阿彌の本質に受動的に寫象するに非ず。その慧態能動的に實在して 機能に實現せしむる慧態なり。本然法爾として 虚徹靈明なる慧態なり。

大圓鏡智 大圓鏡智は觀念と 認識との客觀界にして 精神態の外面なり。阿彌鏡智の本然周徧せることは 吾人の認識と觀念とに於て證明する事を得べし。認識としては 吾人清宵を仰きて大虛を見る時は 無數の星宿は森然として羅列し いよゝゝ觀すれば ますゝ遠大に 望遠鏡を以てしても 實に認識界の無限にして 唯驚嘆の外なきをせる 科學の進歩はますゝ認識界を弘導す。

認識界は凝固たる物質と空間とにして 空は固碍に碍られ 之は兩態を想て 依持するものは認識なり。たとへて械器を用ひて經驗したるものも 一たび意識に入りしよりは 認識の範圍たり。吾人の認識界は自己の主觀寫象より外に存するも 其の内容は吾人の寫象の相當するは 理の由るべき處なり。相宗に頼耶の見分 相分 證分を立て 見分なる自己の主觀も相分なる客觀も同じく 唯識の發現なりと。同く 頼耶は即ち阿彌の隨緣の變象にして 阿彌を離れて 頼耶の本質あるべきに非ず。頼耶轉依して 鏡智となるは 相宗の所説なり。個人は頼耶の個體現なりと云ふが如く 今は阿彌の絶對寫象の個體現なりと定む。

而して認識は天則規定の免れざる機制の爲に 未だ及ばざる處あり。尙一轉して 閉目して觀念的寫象としては無限の空間を觀る。彌々觀すれば彌々遠く 増々廣大に認識界に無數の星宿非列せる如く 觀念世界には十方恒沙塵沙の世界 觀念世界あるは 靜慮熟考の自ら證明する處に非ずや 是絶對寫象の個體象に非ずや。楞嚴經に佛

阿難に 精神の本質と顯動とをよく分別せしめて 顯動を本質と誤るなかれとの旨を明せり。能く自己の精神の 即ち絶對精神の個體現なりと知る時は 五陰即感覺も感情も 智力も 意志も 主觀界も 客觀界も 若くは直接に 若しくは間接に 如來藏性の發現に非ざるものはなしと。阿難よ汝は眼を擧て視よ。彼の太陽は彼に對して寫象する本質は本來何ものであらう。

彼に視る本質は 彼より物光として此に來る物か 將た精神本質が向うに往とやせん種々微問せられたるも 阿難は自ら理の歸趣することを悟解すること能はず。竟に如來のために開示せられて 始めて識る 十方微塵の刹土も 山河大地も 大海も 無數の星宿に至るまで 自己の寫象なることを。實に交徹靈明なる精神態は 空觀的に靈徹し 一切の個人は悉く絶對寫象の個體現とし 直に相交渉して 靈徹して 不可思議なるに非ずや。

絶對寫象は絶對精神の象とし また妙用として 其勢の自然にして 意識不識に拘らず 清虛の星宿は處として 砂土の中に交徹し 皎月降らずして 池水に皎映せり 華嚴に華藏世界所有の塵一塵中佛皆入。又一毛孔中無量刹土有四洲四大海須彌鐵門亦復色悉現其中無邊隘と。法爾として 理不可思議なるに非ずや。是大圓鏡智の絶對寫象の個體現に非ずや。又華嚴に喩を以て 一微塵の中に證せり 經典あり 之を開けば 悉く三千世界の一切の歴史を記すと云ふ如く 個人の寫象は絶對寫象の一現體として 若しくは認識により 若しくは觀念的に 無限の客觀界を寫象するなり。寫象は彌々開けば彌々廣大に 微細に入らば 益々微にして 絶對寫象の一現體なり。然と雖ども吾人は天然規定と 生理機制の爲に 制限せられるは 是止を得ざることなり。

阿彌の無邊智慧は絶對にして 能動態なり。故に客體なり。若し阿彌個人の如くに受動的たらんには 吾人の客體とするに足らず。彼は此を寫象す 此は彼を寫象す。たとへ大小異ありと雖も何も夫れ異らず。吾人の觀念界は全く是絶對寫象の阿彌の個

體現なり。吾人は個人素質の垢穢脱却するに随つて彌々明ならん。吾人の寫象も本來是絕對寫象にして 本來是我に非ず。如斯法然の理性夫れ我ならんや。吾人に現象するも また現象せざるも 絕對に關らんや。吾人はこの絕對寫象の本質を離れてはこの妙川の發現せる理あることなし。

十方法界微塵刹土の微塵には 相互の不誠的に映現し 十方所有の衆生にも 意識と不識とによらず寫象す

また十方刹土の法報應二乗及變化身も互に相靈明交徹し 空間には無邊の法界に偏し 時間としては三際に徹して 念々刻々意識不識を論ぜず 無智にして 自然に映徹し 寫象すべき性質は法爾として存せり。世界の一切は悉く局部なり 個體なり 受動なり。全く觀念の主體として 常恒本然なるは阿彌の無邊光 即ち一切慧態なり 平等性智 性智は鏡智と同一く 絕對精神の屬性にして 清淨本然に法爾に周徧せる 絕對理性なり 鏡智は個體現としては 觀念的認識的に客觀界を照し 性智は個體現としては 客觀界と主觀界の兩面を雙照し 主觀をして 客觀理性に相戻らざることを證する 理性の職とする處なり。

元來阿彌の本質は 純粹の理性のみにして 所謂如理の智如實智のみにして 諸の雜質を交へず。然るに世界人類は 依佗起の性質 即ち天然規定の然らしむる 生理機制の性質を帶て 雜質を錯問することを免かれず。

依佗起性即相家に云はゞ 賴耶の所變の性質未那の我執は 是天然規定として 生理自然の規律たり 第一性のみならば 因縁によらず 絕對の理性のみなるに 依佗因縁の第二性には 依佗性として發すべき性質を有せり。此彼の觀に 我と彼と分別を生ず。また生理の規定として 自家保存の爲に我執を生ずる。

偏執性は普遍的天然規定の外に 個々は元來平等より 差別に開展する 天則の爲に個々各自特殊の性質を有す。偏執と云は、此偏執にも 普遍的偏性と特別的特殊性とあり、甚しき病的偏性あり そは遺傳及び教育等の因縁より來るあり。偏性よく

陶冶する時は 社會によく利用すべきなり。進て依佗性を脱すれば 平等の絕對理性に致一して 個々の特殊性を陶冶せんには 倫理及其它の修養によりても 脱することを得べくも 天然の規定は世界と共に受けたる所謂未耶として 賦性として 受けたるものを脱せんには 阿彌に依らざるべからず。

人は天然規定として主我の性質に覆はるゝも 脱却し得べき理性あるを以て 宗教によつて必ず 脱却せざるべからず。

個人は計らずも 天然規定と主我執のために 絕對平等の最深の理性あることを忘れ いろ／＼偏性を固執して 益々絕對理性とへたゞるべき性格を固くす。

阿彌は絕對理性として 一切を開展して 各自の眞面目を露出せしむべき 光を世界に與へて 休止あることなし。

個人は天然性と 主我性とに覆ふ所あるも 最深は理性なるを以て 阿彌の觀念によつて自己の伏藏開發するときは 自己本絕對理性の個人なるを識らん。

依佗と主我は曆緣對境 種々の念を起し蔭を轉ずるも 理性に於ては常然として照し 湛然として異なることなし。一切の個人は各個の偏性が 種々差別甚だ多し。また天然の性慾に於ては大同小異あり 妙色を好むが如き惡臭を惡むが如きは 天然規定の大同なるも 各自の偏性には又性慾の不同なき能はず。個人は主我を脱し 天然規定の差別性質を超て 絕對理性の中に入て 萬事を照すときは 理性の自然として 偏計なく事理を分別することを得べし。

主我性と天然規定を超越せば 悉く絕對理性なり。若しこの理性開展せば 自己は本來絕對理性の個體なるを證せん。この理性に於ては 無量の個人も 悉く致一することを得べし。本一理體の個々體現なるが故に 對絕對理性の光の中に在て 自己を返照する時は 正午に前境を照す如し。一切の事理として 曉かに黑白分明なり。一切衆生は此理性に依て 平等無差別にして 彼我の見をとらず。

無數の個體もこの絕對理性に統一せらるるなり。この理性には毫厘も私計偏性なし

真理の法爾として偏せず 倚せず 故に無上の權威あり。この無上の權威ある 理性は各個の頭にありて 我を離れ真我の我として 主觀と客觀の二界を統照し 我と彼との無我公平に照し 個人をして絶対と致一せしむ。

元來個人は 世界の絶対根底にして本體たる理性に一切は統一せらるる處の個人なり。之を忘れて 個體自家保存の爲に 本來の主人公を忘るゝ如きは 黑暗に非ずして何ぞや。私性は黑暗にして 理性は光明によりて 自己を照す時は 自己は之に順はざるを得ず。絶対の理性は 一切の個人を統一するのみにあらず 一切の個人を開展して 終局に絶対真理に歸趣せしむる處の光明たり。各個の高等なる理性開展して自ら能く觀じ來らば 自己は阿彌の個々現にして 一切の個々は最深の内面に於て統一せらるゝことを意識すべし。

吾人はこの理性開展し 終局目的に阿彌に歸趣すべき理性あるが故に 理性開展して 阿彌の目的に歸趣せしめん爲の個人の理性なり。十方諸佛聖賢も同一理性にして 吾人もこの歸趣に致一を得ん。而して之を統一するものは 即ち阿彌なり。

この理性は無上権理を以て 主客兩界を統照し 主觀をして 客觀に活動すべきを司命せる理性にして 一切の行爲は この光によりて 阿彌の目的に順じて 行動するものなり。

妙觀察智

絶対觀念の内面的心理的證明なり。即ち佛智見開示の内容として 發現すべき本體なり。絶対精神の個體現顯之を開示とす。鏡智は絶対觀念の客觀々念として現する。

性智は主觀客觀の兩面を雙照し 察智は内面の三昧的にして 是直接に阿彌の本質に關涉すべきものにして是また阿彌の身心は絶対にして 法界周偏せざる處なし。人は三昧に入りて精神の機能致一の中に於て その本質を證明することを得べし。阿彌の本質を智見することを得るは この啓示を除きてあるなし。故に如來一大事の因縁を以て 故に世に出現したまふ 一大事因縁とは 即衆生をして佛の智見を開示して佛

の内容に 悟入せしめんが爲のみ。此三昧即啓示を除きて 佗に阿彌の本を知見すべき理あるなし。物質の中に佛を認識せんと欲する如きは 誤謬の甚だしきなり。觀經に如來是法界身入一切衆生心中。法界とは衆生の心身 衆生の心身即絕對阿彌の個體現なれども 啓示の表明としては 或は感覺的に七寶莊嚴界を顯現し 或は三十二相好光明等の正報を啓示す 或は佛の四智十力大慈大悲神聖正義慈悲等の寫象態として 啓示せらるゝも 或は法身理性態に無相の相として 理相せらるゝものは 是阿彌の本質に 全く種々の妙色莊嚴等ありて 實現するや 將た其本質は精神態にして 極めて純粹なるものなるも 人の機能によりて 種々無盡の妙色莊嚴現するは是注意すべき處なり。

元來本質は純粹なる精神態にて 意識態にも非ず 無知の智自然智態なり。而して絶対なり。

本質本無定相の故に 衆生の念に隨ひ 想に應じて 種々無量の妙色莊嚴の相を呈すべし。若し一定せる相貌あらば 衆生の心念によらず 自ら現すべし。そは三昧に發明したる人の能く證明する處なり。

本質絶対なりと云ふことは 何を以て知るを得とならば 本體一切の處に周偏せる故に 一切處として念に隨つて應現するが故に 若し本質に實在せざれば 一切處に於て發現すべき理なければなり。

また本質には 不可思議にして 種々無盡の内容屬性豊饒なり といふことを得べし。

いかにとなれば 數多の人ありて 一時に種々の異種の三昧に入らば 各自種々の三昧にあつて 妙境を顯示せざるべきなし。若し本質にして 内容豊饒に屬性具備するに非れば いかにかこの現象があらん。

是に付ては 或は云はん そは各自の腦分機能のしかるならんと。自己の精神機能の規によるも この精神機能も 其本體を離れてあるべき理由なければなり 同じく

絶對精神の個體現といはざるべからず。

精神洞然として 靈明に横に十方に徧滿し 豎に三際を徹照して冷然たり。また三昧に依つて 佛知見開示によらずして 佛の内容及び本體及び妙用を論ずることは譬へば生盲にして物色を論ずる如く 豈夫正常なるを得んや。内容に種々無盡の妙象を呈すといふも 先に論じたる如く 其本體の錯雜質なるにあらず。その種々の妙相を顯現するは 即ち本質に主體に對する發現の妙用のみ。そはまた啓示によつて常に經驗する處ならん。

絶對本質の應現無方なるは 例へば一人ありて三昧正定の中にありて盡虚空間悉く七寶莊嚴なるを觀す。同時に一人ありて 満虚空中の佛の全身を現するを觀す。乃至數多の人ありて 同時に 種々の妙境を觀するも 相互に障礙あることなし。或は感覺的莊嚴 或は寫象觀念的智慈悲等の觀 或は理想的法身觀等の種々の妙境を同體現として發現するも 其本質は純粹なる精神態なり。信論に問云 若し諸佛の法身が色相を離れしものならば如何にして能く 相を現するや。答曰く 此法身は是色の體であるが故に能く色相を現す。所謂る本より已來色と心とは不二なり。色性即智なるを以ての故に 色の體が無形を説て 法身一切處に徧すと名づく。智體は一切處に徧在せるとは 譬は鏡の如くにして 色相は映現せる影像の如く 智性の鏡體法界に徧する故に色相も念に隨つて 處として現ぜざるなし。阿彌を求むるに物質的に發見せざるは論をまたす。必ず精神態なれば精神三昧の中に於て 本より非物質なるも 觀念界の妙色莊嚴は 即感覺的の妙境は 決して否定すべからず。また淨土を天然世界に發見せんとするの誤謬は 排斥すると同時に 觀念界の中の妙色莊嚴の清淨世界を否定すべからず。これ啓示によりて 證明する處なればなり。

本質精神態たりとも 其本質妙色莊嚴の顯色は 衆生心機の關係に實現するなり。絶對精神態の徧在するは 人の心機の關係によりて 啓示として發現するは是人間に客體の實存を證知せしむるものにして 宗教の淵源は多く 此の啓示より發するも

のなり。釋尊の伽耶の發悟 導師の般舟三昧の道場 然師の三昧發得の如し。

客體阿彌の本質は 三昧の心機能致一的に實現せる處の歸納を以て 證明することを得べし。さればとて絶對の本質が 人の精神機能に顯現する處なれば 純粹なる本質とは斷言すべからず。すべての大乘教は 多く三昧定力より發表したる經文なれば 縱令說者の人格につきてのいかんを問はず 自ら三昧に入つて 之を證明すべき證據ある以上は 決して否定すべからず。

大乘非佛説のいかんによらず全く絶對本佛の三昧的に啓示として證明する以上は 悉く本佛の啓示とし説法として 印可すべきもので 大乘佛教は 多く是三昧より現はしたるものなれば 能く三昧によつて證明を求むれば 經よく自己の啓示を證明し 自己の三昧よく經を證明すべし。

是心作佛 是心是佛 諸佛正徧知海 從心想生。是故に當に一心に念をかけて 諦かに彼の佛多陀阿伽度阿羅伽三藐三佛陀を觀すべし。心現的證明 即ち佛知見啓示を離れて何によつてか 阿彌の本質と妙用とを説明することを得ん 一切の宗教的證明及び理論は この啓示を以て證すべし。釋迦云く一大事因縁 衆生をして 佛の知見を開示悟入せしめんが爲と。

成所作智 阿彌の本質に別に感覺性あるに非ざるも絶對本質感覺に發現せる處の智性なり。本質同性にて 發現せる機能によりて 種々の象相を呈するに外ならず。

淨土の感覺的微妙の莊嚴は 即成所作智の顯現する象相なり。文化の幼稚なる宗教意識にては 淨土の七寶莊嚴等は 悉く經驗世界の如く 天然的物質的に想像するは 是天然宗教と超天然宗教の區別も別せざる如きの未發の人には是數の免れざる處にして 敢て之を咎むべきに非ず。論外のみ。

七寶莊嚴等の淨土を 物質的に之を求むるを非ざるも 絶對精神態の本質は感覺性に對して 微妙なる感覺世界を建立することを拒むべからず。是啓示によりて證明する處にて 作智の態は佛智見啓示に依て顯現したる故に 體の表象より 増々進て交

徹靈明なる精神態 内外に徹照せる表象の 感覺に發現せる 本質内の感覺性に發現したる象相なれば この精神態ならば 處として淨土に非ざるはなく 方として妙色莊嚴にならざる處あらんや。

例へば青眼鏡にて視る時は 萬物悉く青色なるが如し。感覺的啓示より得たる機能より 感覺性より客觀に向ふ時は 觸目七寶莊嚴界たるを視ん。何の處に於ても 然らざる處なきと識る時は是全く絶對精神の個體現なるを證明すべし。

若し啓示によりて發得したる機能に發現せる 勝妙なる内面的感覺世界を否定せば 啓示をも 否定せざるべからず。若し啓示を否定せば宗教あることなし。故に啓示より客體の内容に入りて 無邊の妙色莊嚴界の建立を拒むべからず。吾人は阿彌の本質は感覺性なきも 感覺性ある個體に感覺界の顯現することは 先哲ゆるす處なるを證す。

起信論に本質の妙用を論じて曰く 眞如の用とは 自然に不思議の業種々の用ありて眞如と等しく 一切處に徧すれども用相の得べき有ることなし いかにとなれば如來は唯法身智相の身第一義諦にして世諦の境界あることなし。施作を離るる但衆生の見聞に益を得せしむるに隨ての故に説て用となす。此内二種あり 凡夫は應身を見て是精神作用と識らずして 全く外より來ると見て 單に色のみを見て其の理を知らず 二に菩薩見る所は報身と爲す 身色無量の色に無量の相に無量の好 所依の依果 亦無量種々の莊嚴あり 示現する所に隨て 即ち邊あることなし 窮盡すべからず。分辨の相を離れて 其の所應に隨て 常に能く住持して毀せず失せず。この文の意非天然界非物質的に依正の莊嚴たるを説す。

また次に凡夫の見る處のものは 麗色なるのみならず。六道ともに各其見る相が同じからず 種々の異類と現じて 受業の相にあらず故に應身と名く。菩薩の所見は深くその本質なる 眞如の性理を信するが故に 外分彼色相莊嚴等の事は來もなく 去もなく 分辨を離る。唯心に依て現じて 眞如を離れず。然れども此菩薩猶自ら分別

して未だ法身の位に入らざるを以ての故に。若し淨心を得れば見る所は微妙にして其用轉た勝れたり。乃至菩薩地盡るに是を見ること究竟す。若し業識を離れては 則ち見相なし。諸佛の法身は絶對にして 彼と此との色相の差別ありて 互に相見るべきに非ざればなり。この非物質なること 六道衆生所見の不同なるは同じく非物質にして心理所現なり。物質の現象にして 所見異なるべき理なければなり。

觀經に所説 淨土に依正二報の莊嚴悉く是非物質にして 精神現象ならざるはなし 若し淨土の莊嚴にして 天然物質的ならば 肉眼等の生得の五官をもて 之を覺することを得べし。

經に 衆生の爲に西方極樂を觀せしめん。當に彼清淨國土を見ることを得ること明鏡を以て自ら而像を見るが如く彼の國土の極妙の樂事を見て 心歡喜するが故に時に應じて 即ち無生法忍を得んと。

又寶地觀より已下悉く觀所成色なり。悉く是非物質精神態感覺的所現ならざるはなし。無量壽佛に無邊の相好光明あり。光明遍く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て給はず。其の光明及び化佛具ふさに説くべからず。憶想して 心眼をして見せしむべし。此事を見る者は 即十方一切の諸佛を見上る。諸佛を見上るを以て念佛三昧と名く。是觀を作すものは 一切の佛身を觀すと名く。佛身を觀するを以て故に亦佛心を見る。佛心とは大慈悲之なり無縁の慈を以て諸の衆生を攝し給ふ。

又無量壽佛身は無邊是凡夫心力の及ぶ所に非ず。阿彌陀佛神通如意十方國に於て變現したまふ事自在なり。或は大身を現すれば 虚空の中に滿ち 或は小身を現すれば 丈六八尺所現の形眞金色。阿彌是物質ならんや。物質にして 十方に遍滿せば孰か之を見ざらん。又或は大身を現すれば 虚空に徧滿し 小身を現すれば 丈六八尺等是非物質なり。物理の規として物質は延長の如く自在なるべき理なければなり。觀經所説の依正二報 共に是れ精神質の感覺現象なり。無量壽經小經 またしからざらんや。

大經に令我作佛國土第一其衆奇妙道場超絕國如泥洹而無等雙其佛國土自然の七寶合
成して爲る。恢廓曠蕩にして 限極す可からず。自然とは是自然の萬種の伎樂ありて
法音に非ざるなし。清揚哀亮にして 微妙和雅十方世界最爲第一と。又七寶宮殿精舍
一切莊嚴は 自然の化成 寶池に入つて意に水をして足を洗しめんと欲せば 水即足
を没す 等乃至自然に隨意開神悅體薄除心垢清明 激潔にして淨きこと形なきが如し
波は自然の妙香を揚ぐ 但だ自然快樂の音のみあり 故に安樂と名く。又宮殿衣服飲
食衆妙華香悉莊嚴の具備る。第六天の自然の物の如し。若し食せんと欲せば七寶の鉢
器自然に前に在り隨意に而も至り 百味の飲食自然盈滿す。此食を實に食する者なし。
但色を見香を聞て 意に食なりと以爲せば 自然に飽足す。身心柔順にして味着する
ことなし事已れば化し去る。復彼佛の國土清淨安穩にして微妙快樂無爲泥恒の道に
次びり。其國の聲聞菩薩天人智慧高明に神通洞達して咸同一類にして形異狀なく 但
だ餘方に因順するが故に天人の名あり。顏貌端正にして世に超へて希有なり。容色微
妙にして 非天人皆自然虛無の身無極の體を受く。

自然とは本然にして 阿彌の本質と共に 法界に周偏して 清淨本然の隨縁の妙用
にして 彼の阿彌の本質は 清淨本然の法界に周偏して 無盡の妙容を具し 自然に
不思議の妙用を有て 摩尼天の思なくして自ら事等と成る如きもの。阿彌の體本然周
偏の隨縁の發現に 感性に顯現する處の妙用なり。

阿彌の本體一切處に周偏せるが故に 機感相應する時は處として現せざるなく 若
は相好光明乃至衆寶莊嚴の淨土微妙にして不思議 示現すること遼あることなく窮盡
すべからず。本體無限の故に 所現の色相も無邊なり。また時間的に論せば本體は永
劫常住の故に 所現の依正二報の妙色莊嚴も常によく 住持して毀せず 失せず。往
生論に二十九種の莊嚴も 悉く二十九種は所現の色相にして 入一法句は本體なり。
本體は周偏せざる處無きが故に 所現の莊嚴も周く顯現せざる處なし。隨縁の業に
隨つて發現す。

吾人は經驗世界の本體を離れて 淨土を求むべからず。衆生天然としては 經驗世
界のみを認む。啓示によりて 本體の内容に向つて觀する時は 一切の處淨土ならざ
るなきを證し得べし。

法華壽量品に衆生劫盡きて大火に燒かるる時も我此土は安穩にして天人常に充滿せ
り。園林諸の堂閣種々の寶を以て莊嚴せり。寶樹には華果多し。衆生の遊樂する處諸
天の鼓を打ち 諸の伎樂を作し 曼陀羅華を雨し佛及び大衆に散す。我淨土は毀せず
而も衆生燒盡さる憂怖諸の苦惱如是悉く充滿す等は 吾人及び衆生は 顯動的經驗界
の表面のみは 感覺的に感知して 未だ本體の内容 種々無盡の妙色莊嚴の常住安穩
なる方面に住する能はず。若し吾人の心機開展して 最深の内容を感ずるときは 十
方法界 處として阿彌の依正の莊嚴界ならざるを知らん。所謂目に其の色を見 耳に
其聲を聞き鼻に其香を知り 舌に其味を嘗め 身に其光を觸れ 心に法を以て緣する
に一切皆甚深法忍を得て六根清徹にして諸の惱患なし。阿彌の本體に向つて 淨土を
求めざれば十萬億土を過るも隨縁の妄境。阿彌の本體に向て求むる時は即ち去此不遠
十方淨土に非ざるはなし。淨土依正の莊嚴は 是本體に適する處の感性に感覺すべき
處の現象にして 此の感覺に對して 自然に不思議の妙象を形現するものを 成所作
智を名く。圓滿具德宗には 超然の淨土を求めず。此經驗世界と淨土とは 同一本質
の二方面なりとす。

元來精神的現象なるを以て 往生もまた必しも肉によらず。精神轉化する時は 常
に淨土に住す。然れども此生理機制のあらん限りは 理想的に淨土を感ずるなり。こ
の命終ては 實在に歸趣するなり。